

られた新憲法は『押しつけ憲法』と言われているが、それはそれとして、憲法前文を読むと人類の崇高な理想が高々と掲げられている。「世界の恒久の平和を念願し……」とある。更にそれに到達するための道順が示されている。これからの日本は「専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しよう」と努めている国際社会において名誉ある地位を占めたいと思う……」私はこれを熟読して、あらためて世界の現状と日本の置かれている地位とを考えるのである。なんと世界の歴史は『戦争と平和』の繰り返しであったことか。また現在も、専制と隷従、圧迫と偏狭が存続して世界各地において動乱や紛争が絶えないことか。平和を維持することは生易しいものではない。「白国のこのみに専念して他国を無視してはならない。」(同前文) これは個人においても同様である。今日、豊かになった日本人は海外に進出して経済活動を行っている。発展途上国の人々に対し経済的圧迫と専制的驕慢な態度をもって臨んでいるようなことはないであろうか。

東洋道徳の本は『仁』の精神である。相手の心になっ

てお互い思いやりつつ調和発展することである。欧米型のように万事ドライにスピーディーに、そして、ビジネス的に押しつけるのとは質が違うのである。われわれは国際人であると同時にまたアジアの中の一員であることを忘れてはならない。——以上は私が満州において得た貴重な体験として言い残しておきたい。

平和は口で唱えるだけでは決してやって来ない。国民一人一人が自ら実行し、正しい認識のもとに国政の中に生かし、さらに国際社会に反映させることによって初めて招来できる。

### 特別な立場に置かれた

#### 引き揚げ者の体験

鳥取県 江原直巳

父母は今の北朝鮮、朝鮮咸鏡南道元山府に明治三十七年ごろ渡鮮、私はその元山で明治四十四年三月一日生まれた。父熊太郎は居留民団副団長、その後元山商業会議

所書記長（今の専務）をし、更に終戦近くまで永年朝日新聞記者をしていた。私が物心ついた時は会議所にいた。当時月給拾圓の辞令を見た覚えがある。父は終戦の年昭和二十年四月二十九日七十二歳で他界した。

私は兄克巳、妹二人の四人兄妹で成長し、兄は剣道、私は陸上競技・スキー・ラグビーの選手となり、昭和七八・九年連続で札幌・大鰐・野沢の全日本スキー選手権大会に朝鮮代表で出場、陸上競技は昭和五年日独親善対抗競技のリレーメンバーにもなった。

終戦八月十五日

昭和十九年七月三十一日最後の召集部隊「虎部隊」に召集され本部付要員となって午前一時出陣式に参加した。完全武装で整列、最終点呼―人員二人超過―お前とお前は予備隊編入―そのお前の一人が私だった。この瞬間私の運命はガラリと変わった。後で分かったがこの部隊はレイテ作戦に向かう途中全員海中に没した。私も恐らく海の藻屑となっていただろう。

その後病を得て即日帰郷し自宅で在郷軍人分会や警防団等を引き受けていた。家は妻の里で、陸軍海軍の指定

旅館で愛媛館といい、朝鮮総督や十九・二十師団長も泊まっていた一級旅館である。終戦の詔勅はその日泊まっていた陸軍将校とともに聞き、初めはわけが分からなかったがだんだん敗戦と分かってきた。

午後四時ごろから外の空気がおかしくなった。何ともいえぬもやもやした空気になり赤旗や朝鮮旗を持った朝鮮人が、「マンセイ、マンセイ。」と叫びうごめき道に溢れ、朝鮮人だけがざわざわし日本人は一步も出られない。国を亡くした頼りなさで不安が一杯。外地で敗戦を受けた者にしか分からないだろう。この時初めて「国」の重みを知った。襲ってくるのは不安だけである。

一週間余りたった八月二十二日、近くの税関で海を見つめていると、遙か沖合から何かすごい勢いでやってくる。見る見るうちに五十隻ばかりのソ連上陸用舟艇が幅数百メートルにわたって波を蹴ってすごい勢いで襲ってくる。ざわざわと押し寄せる姿は実に壮大で、瞬く間に上陸した。

私は特殊な地位に置かれた

八月二十五日夕刻、旅館にソ連将校が十人ぐらい乗り

込んだ。通訳を通じ、「主人を呼べ。」父は老齡なので私が出たが、将校の一人は階段の数段上から私を見下ろしピストルを突きつけ、「この家を接收するから承知しろ。」今でも不思議に思うが、私はまったく驚きも恐ろしくもなく、どきどきもしないしもちろん怖くもない。私は、「よろしい。しかし、ここは昨日生まれたばかりの母子、老人二人と女（女中）七人いる。ここから後ろの部屋（旅館の住居の部分五部屋）を残してもらいたい。」とホテルの部分だけ接收の交渉に入ったが、胸にはピストルを突きつけられたままである。（今でも本当によくやったと思います。クソ度胸というヤツ？）

将校たちは何か話し合っていたが、「部屋を見せろ。」と言う。女中に案内させ三十五部屋全部を見せ、応接間でお茶とお菓子を出させた。…これが効いたようだ。ソ連共産社会ではこんなサービスは思いもかけず、また、永年戦争にすさんだ心が和やかになってきたのか、あるいは家庭の暖かさに触れたのか。それから約三十分いろいろとやりとりをしていたが、どういふ空気からか『将校宿舎』に決まり、私は将校宿舎長、全員従来通り住む

ことができた。日本式の旅館サービスはソ連将校にはまことに喜ばれた。

宿舎に技術将校が一人常駐していて、縁あって埠頭に積んであったソーダ灰から苛性ソーダや石けんを作りウラジオストクに送る工場を造ることになった。私はソ連赤軍太平洋艦隊元山第四工場長（海軍大佐待遇）となった。食糧配給のほか月給千二百円、敗戦の混乱期に保護を受けながら給料をもらっていたのは私のこのグループぐらいだろう。工員には、強制労働で苦しんでいた税関長や中学校長等、相当な人々を助ける意味で働いてもらった。夜間零下十度以下の強制労働に出なくてもよいだけで喜ばれたのに、食糧付月給四百円は本当に感謝された。その時の先生が奇しくも今近くに住んでおられる。

私は大佐の身分証明書を持っているのでどこにでも自由に行けたし、民警隊（朝鮮）が何を言っても平気で拘束されることはなかった。一般家庭には釜を供出せよ、靴を出せ、体温計を供出せよと毎日のように供出命令が出て生活物資を取り上げられるので、ソ連司令部に聞いてもらったら、民警隊だろうと直ちに供出停止命令を出

してくれた。また、日本人が不当な圧迫を受けるとすぐソ連司令部を通じ中止させてもらった。

陰から日本人のために随分尽くしたが、日本人世話会の一、二人しか知ってはいない。しかし、私は満足感が充満していた。日本人世話会は有志によって作られたミニ役場厚生部みたいなもので、引き揚げ後の住所録を作ったり帰国後のためにと財産の証明書を作ったり皆は頼っていた。

#### 引き揚げ脱出難民

ソ連統治下の日本人は満州と同じで惨めである。引き揚げではなく脱出であり、今の東南アジアの姿と全く同じであった。七歳の男の子が百八十キロの清津から一人歩いてきたり川に子供を捨ててきたり、小児を朝鮮人にかけてきたりである。

#### 哀れだった雪中の母と乳呑み児凍死

北から脱出する避難民はほとんど元山府（市）を通過するが、半数は街に入らず山中林道を列をなして逃れた。二月、北鮮は積雪約一メートル。悲しい情報を受けたので世話人会の人々とスキー場横の林道に検分に行った。

そこには、雪の中で大木を背に切り株に腰を降ろして胸を開いて乳を飲ませたまま動かない母親、乳をふくませながら凍死している母親と乳を口にしたまま死んだ赤子の姿があった。通り過ぎる脱出者は哀れを感じても、また我が身そのものでもある。そのまま過ぎ去っていく我々も一瞬戸惑ったが、やがて涙が流れて止まらない。こんな悲痛な姿に接することはもう一生涯ないだろう。脱出の途中、乳を飲ませながら疲れてうとうとしそのまま凍え死に、亡くなった母親とも知らず乳を吸いながらこの子もまた：死んでもわが子を離さなかった姿を想像してほしい。土は凍って掘れないので雪を集めて姿をかくし、春に埋め直すことにし合掌して一旦引き揚げたが、三月訪れた時姿はなかった。

北鮮からは引き揚げではなく脱出であり、三十八度線突破の寸前に殺された者も多数ある。私の兄克巳（当時三十六歳）は脱出の途中で税関の服を着たまま射殺されたと聞いている。闇の舟で海で脱出しかけても北鮮の漁港にだまされて上陸させられ苦しんだ話もたくさん聞いた。何十年築いた財産を全部置いて帰ったが、その額は

莫大であろう。私が日本人世話会で受けた証明は十九万八千円、現在に換算すると五億円近くになるだろう。

昭和二十一年五月、石けん工場長としてモスクワ行きの話がもちあがった。恐ろしくなって急遽脱出を計画、百七十八人を集めて一人八百円で船を買収し南鮮の注文津に上陸、アメリカ舟艇に乗り換え、更に釜山から日本船景福丸で博多港に上陸した。

一人千円の政府手当てで生活はできない。ヤミ商売をしながら辛うじて生活を維持し、引き揚げ者住宅建築にも努力し国家補助を得て成功した。昭和二十五年米子市で鳥取県産業観光大博覧会が開かれるに当たり同事務局次長に推され、成功裡に終わって地元の日新聞社取締役営業局長、次に協同組合丸合理事長、KK主婦の店社長、この十年間に勉強して現在の心理学院学院長になり二十二年めに入る。今、本職のほかに米子市老人クラブ連合会長、鳥取県老人クラブ連合会副会長、米子市シルバー人材センター理事として高齢者社会に奉仕し、米子市その他の当て職が十二ある。

終戦から引き揚げのことは客観的に見つめることができ、全く変わった道を歩いてきたが、書けば一冊の本になるだろう。

## 大陸への憧れと

### 戦後までの生活記録概要

宮城県 千葉 慶吉

昭和十一年、私は知人に勧められかねてから大陸に憧れていたので希望に燃え、朝鮮咸鏡南道西湖津という港にある会社に就職のため渡鮮した。就職中に朝鮮ソ満国境付近で武力衝突が起こった。張鼓峰事件である。

内地日本から多くの将兵が貨物列車で輸送されて来るのを西湖津駅で見送った。隣の興南邑には朝鮮窒素株式会社の大工場があり、街は危機感が高まり、直ちに対空防衛の民間人を含む飛行機監視隊が組織編成された。私も隊員の一人として参加し港外の突端に位置する西湖津燈台で日夜飛行機の監視に当たったが、幸いに現地にお